

論 文

# 謝冰心作品の日本語訳に関する研究

崔 雪

広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程後期

## Research on the Japanese Translation of Bing Xin's Works

CUI Xue

**Abstract:** Bing Xin is a prestigious writer in the field of children's literature in the 20th century. Her beautiful and unique type of writing is named as "Bing Xin Style". Generally speaking, the Chinese literary circles believe that there are two distinct characteristics in terms of Bing Xin Style, that is to say, "classical vernacular Chinese" and "westernization of Chinese". To be specific, "classical vernacular Chinese" means one can enjoy the beauty of concise structure of classical Chinese in her vernacular Chinese articles. Meanwhile, "westernization of Chinese" means the Chinese text is imbued with certain features of English grammar. This paper will focus on the Japanese version of Bing Xin's magnum opus "*To My Little Readers*", study the translation methods of "Bing Xin Style" through the use of syllables, level and oblique tones as well as attributives, and then discuss the translation possibility and methods of literary style based on the previous research.

**Key word:** Bing Xin, "*To My Little Readers*", Bing Xin Style, translation, literary style

### はじめに

異文化の交流がますます盛んになっている今日において、莫言、劉慈欣等の中国人作家が世界文壇で活躍している。では、ある文化ないし、ある国に固有の風物、習慣、風俗、ある作家に特有の作風を如何に翻訳するか、翻訳できるか。これらの問題について文学界では論争が続いている。文学が世界的に流通するために翻訳を介さねばならない、先人の作品の翻訳も研究する必要があると思う。

日中近代文学交流史上、魯迅、郭沫若、張愛玲らなど、独特の文体を持っていた作家が少なくなかった。だが、文体に個人名をつけて称されるのは、謝冰心一人しかいなかった。彼女の文体は、「冰心体」と呼ばれている。小説

「遺書」に、冰心は主人公の口を借り、「文体方面我主張‘白話文言化’、‘中文西文化’、这‘化’字大有奥妙、不能道出的、只看作者如何运用罢了！<sup>1</sup>〔拙訳：文体について、『白話文言化』と『中国語西文化』というのが主張している。この『化』は奥妙で、具体的に言い表せない、作家によって使い方も大分違うだろう。〕と自分なりの見方を表明した。これは「冰心体」を研究する根拠となった。つまり、今日の中国文学界は、一般的に「冰心体」を「白話文言化、中国語西文化」と定義している。

中国文学界に多大な影響を与えた作家として、中国で謝冰心についての研究は後を絶えない。一方、日本では古代から長らく漢文訓読の形で中国文学の翻訳が行われてきた、明治以降はヨーロッパの言語からの無数の翻訳もあり、屈指の翻訳大国ともいえる日本において、特に冰心作品の和訳に多大な貢献をした倉石武四郎は翻訳者だけではなく、それ彼自身が中国文学の学者であり、一生を中国文学についての研究に捧げた。彼は謝冰心の作品、独特の「冰心体」をどう翻訳したのか。

『をとめの旅より子どもの国のみなさまへ』は1923年7月から1926年8月まで、中国の新聞『晨报副刊』『児童世界』で連載されていた。冰心の代表作である。「冰心体」はこの作品で徹底的に体现された。全文は29篇、1923年から1926年まで冰心がアメリカに留学していた間に書かれた作品である。冰心なりの独特の語り口調で、アメリカで見るものや聞くものを国内の子供たちの読者に報告し、何年にもわたり、中国の子どもたちに深く影響を与えた。日本においてこの本は倉石武四郎による翻訳され、最初は『新女苑』で連載された。1942年に三省堂によって出版されている。

本稿では、冰心の代表作『をとめの旅より子どもの国のみなさまへ』を中心に、倉石が翻訳した「冰心体」を考察した上で、文体の翻訳方法と可能性を論じたい。

## 1、『をとめの旅より子どもの国のみなさまへ』の訳者について

### 1.1. 倉石武四郎と中国文学

倉石武四郎は1987年新潟県高田市に生まれた。倉石氏は高田の名門であり、学問の精しい人物を出した。倉石の祖父は藩校の教師であり、父は慶應義塾大学で福沢諭吉の教を受けた。母は専業主婦であったが、文学を嗜み、和歌を作っていた。家族の影響で、中学校から倉石は日本と中国の古典文学

に興味を持ち始め、1916年に第一高等学校に入学した。在学中、中国文学を志し、1918年に東京帝国大学文学部に入学し、支那文学を専攻した。1922年京都帝国大学大学院に入学して、狩野直喜のもとで中国古典文学を研究し続けた。1928年文部省の在外研究員として中国に留学し、1930年帰国した。北京留学中に、倉石は中国語で『述學齋日記』（下記『日記』）という留学日記を書いた。2002年に中国の学者榮新江と朱玉麒によって整理され、中華書局によって『倉石武四郎中国留学記』という名で出版された。本節は『日記』を根拠として、倉石の中国留学を中心に、彼の中国文学の受容を整理したい。

北京に着くやいなや、倉石は『紅樓夢』を勉強し始めた。実は留学する前に倉石は自ら『紅樓夢』を読んだことがある。再び『紅樓夢』を研究するのは、北京で北京語を習得し、北京の風土を身につけるつもりだったからである。『日記』に「钱韜孫先生却夸我们、通过《红楼梦》来学北京话是个绝妙的办法。<sup>2</sup>〔拙訳：錢韜孫先生は「『紅樓夢』を通して北京語を勉強するのは絶妙な方法である」と褒めてくれた。〕」という記述があった。『紅樓夢』の勉強以外に、倉石は北京大学と国立師範大学で、北京語発音の異同、中国語俗語と音韻学の授業を受けた。また、『兒女英雄伝』、『四書』と『詩経』などの中国古典文学も修めた。これらの学習内容から見れば、中国語発音と中国文学の習得は倉石の留学の目標だと推測できる。特に中国語の発音について倉石は工夫した。これは当時の日本の中国語教育に関わると考えられる。当時の日本の外国語教育は帝国大学と外国語学校という二つのグループに分けられていた。英・独・仏の三カ国語は日本の近代化に必要な言語とされ、帝国大学やその前身というエリート養成校で教えられていたのに対して、中国語は商業学校、外国語学校で教えられたのである。帝国大学には漢文学科もあったが、実用会話の習得することを目標にしていたため、教師の発音を学生が暗記・暗唱するという教授法が採用された。文法にも現代文学にも一切触れなかった。中国文学に関する内容はわずかな古典文学に限り、さらに中国語ではなく、漢文訓読で読まれていた。倉石は1918年に東京帝国大学に入学した時、中国語の授業は一年生で週2時間、二年生では週1時間しかなく、履修者も極めて少なかった。<sup>3</sup>『中国語五十年』において、倉石はこれらの状況について以下のように書いている。

英語やドイツ語の教科書はずいぶんむずかしいものをやらされた。それでもへたくそながら西洋人の読む通りに読んだはずです。そしてそれで意味はわかっていました。ところが漢文だけは、あるいは支那文学だけは、不思議なことをやっているものだと考えた。原文を見ながら、その漢字をひっくり返していちいち日本語にして読んだ。第一、とてもまだるっこくしてしょうがないということを感じずようになりました。<sup>4</sup>

こうした状況下で、倉石は訓読ではなく、中国人と同じように発音すべきだと主張した。そのため北京留学という機会を利用して、現場で中国語の発音を修得するのが倉石の目的であったと考えられる。「冰心体」の翻訳は、「白話文言化」という特徴がある。倉石の中国古典文学と語学についての精通は「冰心体」の翻訳に役に立ったと推測される。

また、倉石は中国の学者兪平伯のもとで翻訳を学習した。『日記』によると、毎週の火曜日、兪平伯の邸宅で夏目漱石の作品を素材として翻訳を練習していた。倉石が翻訳した後で、兪平伯が修正し、解説した。練習の重点は、中国語の白話で翻訳することである。これも将来の倉石の翻訳作業の基礎になったと思われる。

学業に専念する傍ら、個人教師として銭玄同、兪平伯らはもちろん、倉石も多くの人を訪問し、交流した。たとえば1929年5月31日、倉石は魯迅の邸宅を訪ねた。魯迅の日記に「三十一日晴。午後金九経借冢本善隆、水野清一、倉石武四郎来観造象拓本。<sup>5</sup> [拙訳：三十一日、晴れ。午後金九経が冢本善隆、水野清一、倉石武四郎を連れて、拓本を見に来た。]」と書いた。文学者に限らず、歴史学者、政治家らの名も見える。これらの中国の知識人との交流で、倉石の中国文化に対する認識が一層深くなったと見られる。

研究面でも、学術交流面でも、中国での二年間の留学生活は、冰心作品の翻訳だけではなく、その後のすべての漢籍翻訳、中国文学研究、さらには中国語教育研究に至るまで土台を築いたと考えられる。

## 1.2. 倉石武四郎と冰心

1930年、倉石は帰国した。北京留学の経験を生かし、京都帝国大学に勤めた。授業において学生たちに訓読を禁じ、中国語音による発音を課した。倉石は魯迅の『呐喊』をテキストにして、これを中国語音で読む授業をおこなった。帝国大学は漢文、外国語学校は中国語という時代に、帝国大学で現代

文学作品をテキストにして、訓読ではなく中国語音で読むという授業をおこなったのは、題材、方法共に画期的なものであった。倉石がこのように新しい中国語教育法を実現し、学習効果を高める中国現代文学作品を探し、自分なりのテキストを作成していたうちに、冰心の『寄小読者』、つまり後に『をとめの旅より子どもの国のみなさまへ』という名で出版された作品と出会った。<sup>6</sup>後には倉石は以下のように述懐している。

現代文学の作品で、なるべく言葉がやさしくてしかも内容のあるものということであさっておりますうちに、見つかりましたのが、謝冰心先生の作品でした。これならば、多くの人に読ませても、内容もうつくしく言葉もやさしいということで、それをかなり拾いあつめまして教科書の材料にいたしました。(中略) わたくしは、現代作家としては、魯迅先生にお目にかかったのが因縁で、先生のもを読み、大学の教科書にもとりあげましたが、あとで謝冰心先生のものにぶつかり、ほんとに偶然ですが、たいへん清純な気持がして、すっきり読みました。<sup>7</sup>

倉石は自分の理想的な中国語の授業を実現するために数種類の中国語テキストを編纂したが、そのうちに冰心作品を収録しているのは『支那語読本 巻一』、『倉石中等支那語 巻三』、『倉石中等支那語 巻四』、『寄小読者抄』<sup>8</sup>と『南帰』である。これらのテキストの中に、冰心だけではなく、郁達夫、巴金、朱自清等様々な現代作家の作品が収録されており、これらのテキストで中国語を学んだ学生たちは、初めて現代中国文学に触れる機会を持ったと考えられる。なお、1941年出版された『支那語教育の理論と実際』一書に、倉石は以下のように述べている。

この小説を読んだことは、いろいろの意味で、これらの中学生たちに深い感銘を与へ、その読後感は、たとへ、文章はただどしくとも、なかなか興味あるものであり、ことに、支那語の教材として、突然、小説を与へられた時の感想も、非常にはつきり書かれてゐる。支那語教授の実績を報告する意味から云つても、将来の教材を安排する上から云つても、相当参考になるものと信じる。<sup>9</sup>

また、最後に「謝冰心の小説を読みて」という付録があり、研究授業で使用された冰心「寄小読者通訊二」の原文と倉石による訳文、生徒の感想文数篇が掲載されている。この中の一篇を以下に引用する。

かねてから何となく女流作家らしい上品な小説と感じてみた支那語小説。これを支那語の研究授業の時間に学んだ事は、我等が胸を打たずにみられなかつた。前日の日曜日、私は一日中、明日の事を念頭に、夢中になつて、小説の解釈に没頭した。途中、自力では到底及ばぬばかりの困難な単語や文章にもぶつかつた。しかし、私は真にこの作者の心となつて之に当り、やつと大体この小説の内容を汲みえた。やはり予想してゐた通り、女らしいやさしい風雅な小説だつた。愈々研究授業の日になつた。先生の御指導によりこの小説の不明の所は明かになり、小説の心を充分味はふ事が出来た。<sup>10</sup>

以上により、倉石は冰心の『寄小読者』について高く評価していたことがわかる。中国において『寄小読者』はもともと子ども向けの作品であり、冰心がアメリカに留学している間に、中国の郷里で生活している弟たちと彼らの友達のために書いた作品であつた。だからこそこの作品の内容は当時の他の作家の作品と比べてわかりやすく、言葉の表現も平易で、日本人の中国語初学者に対する中国語教育のテキストとして最適だと考えられる。

冰心作品の日本語訳に大きな貢献をしたが、戦前倉石と冰心は顔を合わせる機会がなかつた。倉石の記憶によると、彼は冰心と初めて会つたのが戦後の東京で、「もつとも、謝冰心先生にお目にかかつたのは、ずっとあと、戦後に先生が日本に来られるようになってからですが、このかたとは家族的な交際が今でもつづいております」<sup>11</sup>と述べている。冰心は日本滞在期間中、倉石との交流がますます盛んになり、倉石の要請でいろいろな講演と講義を行った。1949年から1951年まで、冰心は初めての外国人女性講師として東京大学で教職に就いた。これも倉石の紹介であると考えられる。このことについて、倉石は以下のように書いている。

もともと東大というところは、西洋の学術輸入のためにひらかれたもので、(中略) 中国の現代語に対する——あるいは中国そのものに対する関心

のたかくないところであって（中略）わたくしはこれを打破しないかぎり、あたらしい学風はおこらないぞと考えて、転任早々、ちょうど在京しておられた謝冰心先生を時間講師におねがいました。<sup>12</sup>

冰心の作品翻訳の面でも、文学交流の面でも、倉石は尽力し、多大な労力を払った。彼の努力がなければ、冰心作品の日本伝播はこれほど順調に進まなかったのではないだろうか。

## 2. 『をとめの旅より子どもの国のみなさまへ』の翻訳

本稿で取り上げる中国語版は2000年に人民文学出版社によって初めて出版され、2014年まで12回印刷された『寄小读者』である。日本語訳版は1955年三省堂から出版された『をとめの旅より子どもの国のみなさまへ』である。

前文に書いたように、中国において冰心の独特の文体は「冰心体」と呼ばれている。「冰心体」は、白話文章の中に文言を織り混ぜ、中国語で書いた文章の中に英文法の特徴も兼ね備えているという文体である。文章は白話文学の簡潔さと古典文学の優美さを兼ね備えており、読者に英語の妙味も感じさせる。

本節では「白話文言化」と「中国語西文化」の二つに分けて「冰心体」の翻訳法を分析する。

### 2.1. 「白話文言化」の翻訳——音節、平仄

中国の学者祝敏青と岳東昇は「白話文言化」について「韻律感」という概念を提唱した。つまり読者が中国語で作品を読むとき、中国古典詩を読むように律動感や音の響き合いなど、聴覚上の美感が感じられるのである。ここでは主に以下の二つの面から論じたい。

#### 2.1.1. 音節の対応

中国語の漢字一文字は一音節から構成されている。こうした特徴は漢詩文における修辞上の技法の一つ——対句を生じさせる。古田敬一は、対句について「字数や音律のような形式面とともに、意味趣向の内容面も、対偶美をあくことなく追求する」<sup>13</sup>と定義する。「冰心体」は音節間の対立、つまり〈単音節語〉対〈単音節語〉、〈多音節語〉対〈多音節語〉という形式を重視して

いる。意味上は必ずしも対応するわけではないが、語形音節の面には簡単な対句を形成する。これらの対句は白話で書いた文章の中に溶け込んで、文章に白話文学の自由さと古典詩文の簡潔性を与えた。中国語で文章を音読すれば、韻律感が生じるのである。

原文の「通讯十一」に、以下のような描写がある。

……这总是第一次抛弃一切、完全来与“自然”相对、以读书、凝想、赏明月、看朝霞为日课。有时半夜醒来、万籁俱绝、皓月中天、倏然回顾、觉得明中一片空寂。<sup>14</sup>

この一段落の中に、「读书」と「凝想」は〈二音節〉対〈二音節〉、「赏明月」と「看朝霞」は〈三音節〉対〈三音節〉、「万籁俱绝」と「皓月中天」は〈四音節〉対〈四音節〉である。名詞対名詞、動詞対動詞、意味の面でも、語形音節の面でも対句である。冰心はこれらの対句を散文に融合して、文章に古典詩文と白話の筆法とを組み合わせさせており、極めて情趣に富むものに仕上がっている。

倉石は、以下のように日本語に訳した。

今度こそ初めて、いっさいをふりきって、まったく自然を友とする生活です。本を読むのと、ものを思ふのと、月を見るのと、朝がすみを眺めるのが日課です。ときどき、夜なかに目がさめますと、音といふ音がみな絶えて、白い月がなかぞらにさえ、ふとあたりをみまはずにつけても、心の中まで澄みわたってゐるやうに感じられます。<sup>15</sup>

日本語訳版では、二音節と三音節の対句に対して「本を読むのと、ものを思ふのと、月を見るのと、朝がすみを眺めるのと」と翻訳している、「○○を△△のと」という語形を使うため、文字数では完全に対応しているわけではないが、日本語で音読しても韻律感が感じられる。〈四音節〉対〈四音節〉の対句に対して「音といふ音がみな絶えて、白い月がなかぞらにさえ」と翻訳し、「○○が△△」という語形も順守している。倉石の翻訳の手腕がうかがえる。

また、原文の「通讯三」に、冰心が上海に行く途中で見た景色を描いている。



今早过济南、我五时便起来、对窗整发、外望远山连绵不断、都没在朝霞里、淡到欲无。只有淡蓝色的山峰一线、横亘天空。<sup>16</sup>

この47字しかない一句の中に「对窗整发、连绵不断、淡到欲无、山峰一线、横亘天空」という五つの四字漢字がある。意味上は対句となっていないが、中国語で読むと節間の律動感が感じられて、すらすらと口から出てくる。しかし、日本語版では、これらの四字を「窓にむかって髪を結びました」、「消えぬばかりにとけこみ」、「うす青い山の背がただひとすぢ大空を限ってみます」と翻訳されており、韻律感は失われている。

対句は中国古典文学において非常に重要な修辞法の一つである。文のリズムを整えて、均整美を出す表現技法として、中国の古典詩によく使われている。対句の運用は冰心体に詩のような韻律感を与えており、「白話文言化」の中心的な表現様式である。1.1に述べたように、中国古典文学について倉石の造詣は決して浅いものではない。前文の対句に対する巧みな翻訳からも倉石の学問の深さがうかがえる。だがなぜ後文の四音節の韻律感を翻訳しなかったのか。これは中国語の特質と関係があるだろう。前述したように、中国語の漢字一文字は一音節から構成されている。しかも音節の発音時間は全部同じである。そのため、対句を構成する二句は、同じ音節、同じ時間、同じ文法構造を持たせることができる。日本語には、そうした特質がないので、完璧な節間の律動感は原理的に作ることが難しい。それを求めるなら、訓読のほうが優れているが、1.2に述べたように、中国語について、倉石は訓読をなるべく避けたいと主張している。

## 2.1.2 平仄の重視

対句のほか、平仄の表現にも注目しなければならない。『日本国語大辞典』によると、平仄は、漢詩において、音律上の調和を目的として句中における平字と仄字の配列の規定である。簡潔に述べると、中国語の漢字には一字一字音があり、上がったりがったりというリズムがある。この音のことを韻と言い、リズムのことを平仄と言う。図1のように、古代の中国語の発音にはすべての漢字は「平」、「上」、「去」、「入」といった四つの声調がある。この四つの発音はまた「平」字、「仄」字という二つの領域に分かれている。今まで長い時間をわたって、「入」声は失われてしまい、現代中国語の発音もか

なり変わってしまった。現代中国語の発音には四つの声調、つまり第一・第二・第三・第四声がある。発音の違いから、古代中国語の声調と現代中国語の四つの声調とは完全に対応させることが難しいが、多数の場合は現代中国語の第一と第二声は平字であり、第三と第四声は仄字である。平仄の組み合わせによるリズム感是中国古典詩の最大の特徴だと言える。

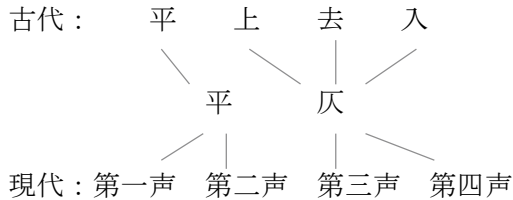


図 1 :

冰心体にはこうしたリズム感も感じられる。

原文の「通讯九」の中の、「qián lǜ nóng hóng zhēng yán dòu yàn浅绿浓红、争妍斗艳」<sup>17</sup>一句は仄仄平平对平平仄仄である。また「通讯二十七」の「zhāo yáng zhèng nuǎn hòu niǎo chū lái朝阳正暖、候鸟初来」一句は平平仄仄对仄仄平平である。これらの言葉は〈四字〉对〈四字〉で、文字数と平仄を全部合わせて、音読すればとリズム感が感じられる。冰心自身も句尾の平仄の相対性を重視している。例えば、「通讯十四」の中の「wǒ ài tīng suì xuě hé wēi yǔ wǒ ài kàn míng yuè hé xīng chén我爱听碎雪和微雨、我爱看明月和星辰（中略）sù xuě hé wēi yǔ zài yán shàng míng yuè hé xīng chén zài lán páng碎雪和微雨在檐上、明月和星辰在阑旁」<sup>18</sup>一句の場合、「雨」と「辰」は仄对平、「上」と「旁」も仄对平である。このような音節間の平仄の対立は、文章に高低抑揚を付け、音楽のような美感を与えた。

では、日本語訳版に倉石はこれらの平仄の対立をどう翻訳したのだろうか。「浅绿浓红、争妍斗艳」を倉石は「浅い緑に濃い紅と、とりどりに美しさを競ってみます」<sup>19</sup>と翻訳した。「朝阳正暖、候鸟初来」は「朝日が暖かく、渡り鳥も飛んできます」<sup>20</sup>と訳している。「我爱听碎雪和微雨、我爱看明月和星辰（中略）碎雪和微雨在檐上、明月和星辰在阑旁」は「わたしは粉雪やしぐれの音がすきです、月や星を眺めるのがすきです（中略）粉雪やしぐれが軒をたゞき、月や星が阑干のあたりまでのぞきこみますと（後略）」<sup>21</sup>と訳した。日本語で音読すればすぐわかるように、リズム感は全く感じられなくなる。

これも中国語と日本語の発音の差異に関わる問題である。中国語は声調言

語である。音節内で、音節単位に高低変化があると同時に、語の場合は、その語の中の各音節が単独に持つ高低変化（声調或いは四声）もある。お互い組み合わせれば、平仄のような形式になり、発音だけでリズム感が感じられる。対して、日本語はピッチ・アクセント言語である。高低アクセントしかないため、発音だけでリズムを感じるのには難しい。

本節で「音節の対応」と「平仄の重視」の二つに分けて、冰心体の「白話文言化」の日本語訳を分析した。いずれの場合も、日本語訳には中国語原文の韻律感の味わいを再現できない。これは倉石の語学能力ではなく、日中両言語の本質的な差異に関わる問題である。たとえ倉石の中国古典文学についての造詣が深くとも、言語間の固有の壁は越えられないのだ、と考えられる。

## 2.2. 中国語西文化——修飾語

1991年、中国第一回冰心学術検討会で、中国の現代文学研究者は冰心体の二つの特徴について、「“冰心体”是冰心所独有的文体、其主要特征是“白话文言化”和“中文西文化”、而“两化”之中、前者占据主导地位。<sup>22</sup>〔拙訳：『冰心体』は冰心の特有の文体である、『白話文言化』と『中国語西文化』という二つの特徴がある、この中で前者は支配的である。〕」とまとめた。つまり、すでに分析した「白話文言化」ほど、「中国語西文化」の表現は顕著な特徴を示さないと言うのである。

「中国語西文化」について、冰心研究者の楊昌江は「多くて、長い修飾成分の使用」<sup>23</sup>という点が最も顕著だと指摘している。中国の言語学者王力の考察によると、古代中国語修飾語の長さは現代中国語より短かった。<sup>24</sup>つまり、新文化運動から、欧米文化の導入と翻訳文学の流行とともに、中国語が大量の英文法を吸収し、修飾語が長くなり、構文もより複雑になった。冰心もこの影響を受けている。

本節では、修飾語の長さを中心として、「中国語西文化」の翻訳を考察する。原文の「通讯十」の、母の愛について、冰心は以下のように書いている。

母亲的爱、或隐或显、或出或没、不论你用斗量、用尺量、或使用心灵的度量衡来推测；我的母亲对于我、你的母亲对于你、她和他的母亲对于她和他；她们的爱是一般的长阔高深、分毫都不差减。<sup>25</sup>

この長句の構造を分析すると、「母亲的愛」は主語、「是一般的长阔高深」は述語、述語の前の「她们的愛」は反復強調、「分毫都不差減」は述語を補充する補語である。これら以外のすべての部分は述語を修飾する修飾語である。修飾語が多いため、この句も長くなる。修飾語は三つの面から母親の愛情を修飾している。「或隐或显、或出或没」は状態の面、「不论你用斗量、用尺量、或使用心灵的度量衡来推测」は程度の面で、「我的母亲对于我、你的母亲对于你、她和他的母亲对于她和他」は範囲の面である。各面から、母親の愛情を繊細に描いている。長い修飾語の使用は英文から受けた影響だろう。全体的に見ると、この句は長いが、実は幾つかの短句から構成されている。さらに各短句は字数が相対し、簡単な対句を形成した。これは中国語の簡潔の習慣に沿うものである。要するに、この句は「中国語西文化」の代表的な表現である。では、倉石武四郎はこの句をどのように翻訳したのか。日本語版の第十章で、倉石は以下のように翻訳している。

母の愛だけは、世界のはてまでも、見えても隠れても、ますます計らうと、たましひの度量衡でおし計らうと——わたしのおかあさまのわたしに対する愛、あなたのおかあさまのあなたに対する愛、あのひとのおかあさまのあのひとに対する愛、さういった母の愛は、まったく同じ長さ、同じはど、同じ高さ、同じ深さで、紙ひとへの違ひもないです。<sup>26</sup>

倉石は語順などをいっさい変えずに訳している。ただし、原文では、修飾語が長いので、冰心は二箇所でセミコロンを使った。一つ目のセミコロンは「(前略) 或使用心灵的度量衡来推测; 我的母亲对于我 (後略)」で、母親の愛情を軸に前後二句を分けた。二つ目は「(前略) 她和他的母亲对于她和他; 她们的愛是一般的长阔高深 (後略)」で、修飾語と述語を隔てた。中国語と英語において、セミコロンはよく使われているが、日本語においては、滅多に使われない。倉石はセミコロンの代わりに、ダッシュを使って、前後二句を分けている。

中国語より、日本語の膠着語の付着して容易に離れない性質によるもので、長い修飾語が多用されている。これは長い連体修飾節と呼ばれている。日本語の長い連体修飾節を中国語に翻訳する場合、中国の学者は「不变语序、直接连译。<sup>27</sup>〔拙訳：連体修飾節の修飾関係を変えず、そのまま中国語に

訳す。]という方法を編み出した。では、逆に、中国語の長い修飾語を日本語に翻訳する場合、倉石のように訳者も記号を少し調整して、自然に原文のまま訳すれば、ちょうど日本語の習慣に合わせたと言えるのではないだろうか。

本節では「中国語西文化」の翻訳方法を考察した。元々原文において「中国語西文化」の表現は顕著ではない。また、日中両言語の習慣の差異によって、「中国語西文化」の翻訳は語順、修飾語の長さ等一切を変えなくとも翻訳できるので、「白話文言化」の翻訳より容易である。

### 3、文体と翻訳

冰心が「白話文言化」と「中国語西文化」を打ち出したのは1922年のことであった、阿英が「冰心体」という概念を提出したのは1928年、倉石が始めて『をとめの旅より子どもの国のみなさまへ』を訳したのは1940年である。当時の倉石が「冰心体」について知っていたかどうかの証拠となる資料は見当たらないが、倉石の中国語の造詣の深さを考えると、冰心作品の独特の文体を多少なりとも感得していただろうと考えられる。2.1と2.2において、「冰心体」の翻訳手法を考察した。では、作家の独特の文体は一体翻訳できるか、できるとすればどう翻訳すべきだろうか、これらの問題について本節で論じたい。

まず、「文体」の概念を明確にしなければならない。文体という概念は複雑な構造を持っている。文体は誰にでも直感できるが、説明することは非常に困難である。文体の概念は多様性を持っている。文体論は言語学、修辞学、文学などいろいろな領域に関連する。本論で扱っているのは文学的文体論である。すなわち、作家の個性、作家特有の文章のスタイルを指す。イギリスの言語学者ジェフリー・N・リーチとマイケル・H・ショートは、『小説の文体』で文体とは、作家の自分なりの言語の選択であり、規範的または従来の言語使用規範からの逸脱だと主張している。<sup>28</sup>また、文体の形成と表現の両面から文体を論じるべきだと指摘している。

一方、翻訳者は作家と読者の間の架け橋である。訳文の文体は実際は作家ではなく、翻訳者によって決定される。翻訳者は如何に原文の文体を再現するのか。中国の翻訳学者王恩科は異文化コミュニケーション行為としての翻訳行為に影響を与える主な要因として、言語的差異や文化的差異、形而上の

意識形態や翻訳者の言語的素地、文化的素養と文化意識、そして「Cultural Pre-Structure」を挙げている。<sup>29</sup>「Cultural Pre-Structure」というのは、人の潜在意識の中であって人の行為に影響を及ぼすものである。つまり、人の行う情報解読行為はゼロから始まるのではなく、自己の世界観や価値観、意識形態や既存の情報、過去の経験が基礎となつて行われる。翻訳者が成長した言語環境、過去の経験など全てが翻訳のアウトプットを決定する要因と考える。王のこの理論からわかるように、翻訳者の翻訳行為は、①原文の解読、②原文の表層、深層にある言語的文化的差異の転換を行うこと、③受容国の文化、審美などを考えながら、最終的な訳文を産出すること、三つのステップがある。この三つのステップの中で、①と②は「Cultural Pre-Structure」から影響を受けるものである。

1.1と1.2においてに翻訳者の倉石武四郎の学術背景と中国語以上の造詣について述べた。社会背景から見ると、「白話文文化」でも、「中国語西文化」でも、当時の中国と欧米諸国の往来と関わっている。閉鎖的な封建国家から開放的な近代国家への転換とこれによる文学の革新運動は、中国人と日本人にとってはある種の共感が生じるだろう。個人的な背景から見ると、冰心も、倉石も、豊かな知識人家庭に生まれ、幼いから良好な教育を受け、当時の自国の名門大学に入学し、後に留学した。経歴面では、二人とも当時のエリートと言える。『をとめの旅より子どもの国のみなさまへ』の「翻訳者のことば」で、倉石は以下のように書いている。

わたくしは、この本をくりかへしくりかへし読みました。普通の本は、二度めには涙が出ないものです。しかし、この本は、読めば読むほど目がしらが熱くなります。これこそ、国と国との間がらはどんなになっても、人と人との魂の奥に呼びかはずものが潜んであることを証明するものと思ひます。あるいは、わたくしの魂の奥で、冰心女士の「おかあさま」と、わたくしの「おかあさま」とが、ちやうど重ね写真のやうに、重り合つて写ったのかも知れません。<sup>30</sup>

この叙述からわかるように、倉石は彼と冰心との魂の奥にあるもの、母への愛情が共通していると考えられる。国によって文化的差異と意識的差異が存在することは当然であるが、類似した成長過程を持っている二人の基本的な世界観と価値観には共有される部分もあつただろう。原文の深層にある作

家の真意を、倉石は心情として理解しようとしていたのである。

以上のように、筆者が文体の形成の視点から倉石の翻訳行為の①原文の解読と②原文の表層、深層にある言語的文化的差異の転換を行うことを分析した。では、文体の表現面では、倉石がどのように受容する側の文化や審美などを考えながら、最終的な訳文を産出したのだろうか。訳文は「冰心体」を再現したのだろうか。

ジェフリー・N・リーチとマイケル・H・ショートは『小説の文体』で文体の表現について、語彙、文法、文彩、文脈の四点に区分して整理している。2.1と2.2で「冰心体」の「白話文言化」と「中国語西文化」の翻訳を分析した。この中で、音節の対応と平仄の重視は文彩と語彙に属し、修飾語の長さは文法と文脈に属する。先述の通り、音節の対応と平仄の重視の面では、日本語訳には中国語原文の味わいが再現できない。文法と文脈の面では、冰心体の長い修飾語の用法はちょうど日本語の言語習慣に合致するので、倉石の翻訳も適切なものであった。

アメリカの言語学者ナイダは、「翻訳の自然さ」という翻訳の要求を提唱した。「翻訳の自然さ」というのは、メッセージは受容者の言語的ニーズと文化的期待に合わせなければならない、表現の完全な自然さを狙うということである。つまり、受容者の言語的習慣を尊重し、起点テキストを受容者の最も読みやすい形式に翻訳する翻訳方略である。日本語において、対句の修辭法があるが、日本語の発音規則により、中国語と同じような音節の対応の達成は不可能ともいえる。日本語に平仄という詩の技法もない。もし倉石が訳文に音節の対応を無理に要求しようとすれば、訳文の自然さはきっと失われるだろう。翻訳の自然さを追求すれば、文法や語彙の変更、さらに文化的内容の翻案が不可欠である。この点について、ナイダも「翻訳の際は文章の意味がまず優先しなければならない（中略）従って、原語と訳文の形式上の構造がやや大きく変わってしまっても、それは許されることである（後略）」<sup>31</sup>ことを強調している。つまり、翻訳学においては、文体の形式よりも、内容が重要であり、読者に伝えなければならないものなのである。この点について、文体論にもほぼ同じような見解がある。言語学者眞砂薫はルネサンス時代の William Alexander と Dryden が提唱した文体論を解読した結果、①主題（あるいは内容）と表現（あるいは形式）は区別される。②内容は表現に優先し、より重要であると考えている。<sup>32</sup>

原文の味わいが再現できないという点について、倉石は自分の意見を『をとめの旅より子どもの国のみなさまへ』の後書きに次のように書いている。

文章もやさしく、漢字もなるべく見なれたものに限りたいと考へました。中でも、漢字をどの程度に使はうかといふことで、何より頭を悩ました。しかし、今もって自分でも満足できるやうにはなりません。<sup>33</sup>

このように、倉石は読者の読書体験を考えながら、なるべく読者が読みやすくなるように、『をとめの旅より子どもの国のみなさまへ』を翻訳したのである。

以上の分析から次のことがわかる、倉石の訳文に「冰心体」の「白話文言化」が再現できないのは、倉石の原文に対する読解力の不足ではなく、倉石の表現力の乏しさでもなく、倉石が文学的な審美を放棄しないと同時に、日本の言語習慣を尊重した結果である。つまり、倉石は同化的翻訳を行った結果なのである。ここで言う同化とは、起点言語の文化は翻訳の過程で、目標言語の文化規範に適合するように変容させられる翻訳方略のことである。同化と対照的に異化とは、起点言語の言語的、文化的な特質に合わせる翻訳方略である。<sup>34</sup>同化の場合には、翻訳の自然さ、あるいは流暢さが保証できる。他方、異化の場合には、起点言語はできるだけ元の形式を残す形で翻訳されるため、自国の既存の文化と古い秩序に衝撃を与えることができる。フランスの翻訳理論家ベルマンは散文の翻訳について以下のように指摘している。

散文の翻訳の主たる問題は、小説や随筆における定型な多言語性 (polylogic) を尊重することである。<sup>35</sup>

上記でベルマンが重視しているのは、小説の言語的多様性と創造性である。倉石の同化的翻訳は目標言語の既存の文化（文学）の革新を引き起こすことが難しいと見られる。だが前述のように、中国において『寄小読者』は子ども向けの作品であり、内容は冰心の日常生活で、もともと言葉が洗練されて読みやすい。倉石はこの作品を日本語に訳した時も日本人の子どもたちを読者に想定し、読みやすいよう工夫しながら翻訳しただろう。子ども向けの作品と起点テキストの性格という二つの視点から見れば、倉石は同化的翻



訳を「選択する」より、こういう翻訳方略を採ることは必然だった。

### おわりに

「作家の独特の文体は一体翻訳できるか、どう翻訳すべきか」については、ある程度、文体が翻訳できるが、翻訳できない部分もある。これは、翻訳者の言語的素養や文化的素養に関わり、言語間の本質的な差異にも関わる。文体について、先述したように、ジェフリー・N・リーチとマイケル・H・ショートは作家の自分なりの言語の選択で、規範的または従来 of 言語使用規範からの逸脱だと主張している。では、文体の翻訳にも目標言語の旧来の言語規則と習慣からの革新が期待できる。だが見落としてはならないのは、この革新は強制することはできない、原文の性格によって決定されるということである。

### 注：

<sup>1</sup> 冰心《遗书》《小说月报》、1922年6月、第13卷第6号

<sup>2</sup> 倉石武四郎著、榮新江 朱玉麒 『倉石武四郎中国留学記』、中華書局、2002年、p.211

<sup>3</sup> 宮本めぐみ「近代日本における中国語教育と冰心 —倉石武四郎の中国語教育を中心に—」、『お茶の水女子大学中国文学会報』32号、2013年、pp.66-50

<sup>4</sup> 倉石武四郎『中国語五十年』、岩波書店、1973年、p.19

<sup>5</sup> 魯迅『魯迅全集』第一六卷、人民文学出版社、2005年、p.136

<sup>6</sup> 宮本めぐみ「近代日本における中国語教育と冰心 —倉石武四郎の中国語教育を中心に—」、『お茶の水女子大学中国文学会報』32号、2013年、pp.66-50

<sup>7</sup> 倉石武四郎『中国語五十年』、岩波書店、1973年、pp.52-53

<sup>8</sup> 『寄小読者抄』は活字の鑄造が間に合わなかったのか謄写版である。ほぼ全文に注音字母が付けられており、授業や講習会のテキストに使われたようである。

<sup>9</sup> 倉石武四郎『支那語教育の理論と実際』、岩波書店、1941年、p.245

<sup>10</sup> 倉石武四郎『支那語教育の理論と実際』、岩波書店、1941年、付録

<sup>11</sup> 倉石武四郎『中国語五十年』、岩波書店、1973年、p.53

<sup>12</sup> 倉石武四郎『中国語五十年』、岩波書店、1973年、pp.90-91

<sup>13</sup> 古田敬一『中国文学における対句と対句論』、風間書房、1982年 p.4

<sup>14</sup> 冰心《寄小读者》、人民文学出版社、2014年、p.48

<sup>15</sup> 冰心著・倉石武四郎訳『をとめの旅より子どもの国のみなさまへ』、三省堂、1955年、p.90

- <sup>16</sup> 冰心《寄小读者》、人民文学出版社、2014年、p.8
- <sup>17</sup> 冰心《寄小读者》、人民文学出版社、2014年、p.32
- <sup>18</sup> 冰心《寄小读者》、人民文学出版、2014年、p.69
- <sup>19</sup> 冰心著・倉石武四郎訳『をとめの旅より子どもの国のみなさまへ』、三省堂、1955年、p.60
- <sup>20</sup> 冰心著・倉石武四郎訳『をとめの旅より子どもの国のみなさまへ』、三省堂、1955年、p.302
- <sup>21</sup> 冰心著・倉石武四郎訳『をとめの旅より子どもの国のみなさまへ』、三省堂、1955年、p.129
- <sup>22</sup> 作者不詳「中国现代文学研究丛刊」、1991.4.2
- <sup>23</sup> 楊昌江《论冰心体语言》、湖北第二师范学院学报、2018年第10期
- <sup>24</sup> 王力《中国现代语法》、商务印书馆、1985年
- <sup>25</sup> 冰心《寄小读者》、人民文学出版社、2014年、p.44
- <sup>26</sup> 冰心著・倉石武四郎訳『をとめの旅より子どもの国のみなさまへ』、三省堂、1955年、p.83
- <sup>27</sup> 孔繁明『日漢翻訳要義』、中国对外翻译出版公司、2004年、p.133
- <sup>28</sup> ジェフリー・N・リーチ マイケル・H・ショート著、石川慎一郎・瀬良晴子・廣野由美子訳、研究社、2003年
- <sup>29</sup> 王恩科・李昕・奉霞《文化视角与翻译实践》、国防工业出版社、2007年
- <sup>30</sup> 冰心著・倉石武四郎訳『をとめの旅より子どもの国のみなさまへ』、三省堂、1955年、「翻訳者のことば」なお、引用にあたり、旧字体を新字体に改めた。
- <sup>31</sup> E.A.Nida, C.R.Taber N.S. Brannen 著・沢登春仁 升川潔訳『翻訳—理論と実際』、研究社、1973年、p.17
- <sup>32</sup> 眞砂薫「言語学的文体論の概念と可能性について」、『近畿大学語学教育部紀要』2巻1号、pp.103-115
- <sup>33</sup> 冰心著・倉石武四郎訳『をとめの旅より子どもの国のみなさまへ』、三省堂、1955年、後書き
- <sup>34</sup> 吉村正和「トランスレーション言語研究—意味の等価を超えて—」、『多元文化と未来社会』、2005年、pp.171-183
- <sup>35</sup> アントワーヌ・ベルマン著・藤田省一訳『翻訳の倫理学 彼方のものを迎える文字』、2014年、晃洋書房、p.54

## 引用文献

- 冰心著 倉石武四郎訳 『をとめの旅より子どもの国のみなさまへ』三省堂 1955  
冰心《寄小读者》人民文学出版社 2014

## 参考文献

## 日本語

- アントワヌ・ベルマン著・藤田省一訳『翻訳の倫理学 彼方のものを迎える文字』  
晃洋書房 2014
- 梶茂樹「世界の声調言語・アクセント言語（＜特集1＞世界の声調・アクセント言語）  
音声研究5巻1号 2001
- 倉石武四郎『支那語教育の理論と実際』岩波書店 1941
- 倉石武四郎『中国語五十年』岩波書店 1973
- 虞萍『冰心研究 ——女性・死・結婚——』汲古書院 2010
- 候鋭「日本語アクセントと中国語声調の比較」新潟経営大学紀要11巻 2005
- 後藤延子「李大釗資料拾遺、並びに覚書」信州大学人文科学論集＜人間情報学科編＞  
巻30 1996
- ジェフリー・N・リーチ、マイケル・H・ショート著 石川慎一郎 瀬良晴子廣野由美  
子訳「小説の文体：英米小説への言語学的アプローチ」研究社 2003
- 謝冰心著 倉石武四郎訳『中国文学をどう鑑賞するか』大日本雄弁会講談社 1949
- 朱琳「『中国文学月報』から見た近代日本知識人の中国文学認識—大衆重視の視点か  
ら—」国際文化研究 2013
- 朱琳「近代日本における知識人の中国認識—中国文学研究会を中心に—」東北大  
学 2017
- 永田小絵 平塚ゆかり「翻訳者の内的世界における再構築としての翻訳」通訳翻訳研  
究9巻 2009
- 萩野脩二『謝冰心の研究』朋友書店 2009
- 眞砂薫「言語学的文体論の概念と可能性について」近畿大学語学教育部紀要2巻1  
号 2002
- 松尾善弘「近代詩の平仄式と対句法について」鹿児島大学教育学部研究紀要・人文・  
社会科学編39巻 1988
- 松尾善弘「近代詩の平仄式と構句法」アジアの歴史と文化4巻 2010
- 宮本めぐみ「近代日本における中国語教育と冰心—倉石武四郎の中国語教育を中心  
に—」お茶の水女子大学中国文学会報32号 2013
- モナ・ベイカー、ガブリエラ・サルダールニャ編 藤濤文子 監修・編訳 伊原紀子、田  
辺希久子 訳『翻訳研究のキーワード』研究社 2013
- 森田繁春「言語学と文学の交わり：構造的文体論—試考」大阪大学大学院英文学談話  
会 1976
- 熊文莉「中国文学会にとっての「翻訳」」朝日大学教育紀要36号 2010

## 中国語

- 阿英《谢冰心》《中国現代女作家》北新書局 1928
- 冰心《我的文学生活》《青年界》第2卷第3号 1932
- 冰心《写作的练习》《文艺写作经验谈》重庆天地出版社 1943
- 冰心《我是怎样写《繁星》和《春水》的》诗刊 1959.4
- 冰心《從『五四』到『四五』》文艺研究 1979.5
- 冰心《创作谈》《民族文学》 1981.4
- 冰心《我和外国文学》《外国文学评论》 1990.2
- 冰心《回忆中的胡适先生》《新文学史料》04期 1991
- 冰心《我与古典文学》《古典文学知识》03期 1992
- 卜佳《从文体学角度谈小说文体翻译》《剑南文学（经典教苑）》02期 2012
- 倉石武四郎著 柴新江 朱玉麒編《倉石武四郎中国留学记》中華書局 2002
- 池周平《论“冰心体”及其文体史价值》《文学界（理论版）》04期 2012
- 贾真《日语定语的翻译》《剑南文学（经典教苑）》04期 2014
- 李竹《浅析张爱玲小说《色·戒》的文体翻译》《英语广场（学术研究）》02期 2015
- 彭建华《浅论在白话文学建构中的冰心》《攀枝花学院学报》01期 2007
- 錢理群 温儒敏 吴福辉《中国现代文学三十年》北京大学出版社 1998
- 譚皓《倉石武四郎留华生活初论》徐州师范大学学报02期 2012
- 王顺洪《倉石武四郎——现代日本汉语教育的先行者》国外语言学03期 1993
- 王恩科 李昕 奉霞 编著《文化视角与翻译实践》国防工业出版社 2007
- 肖时英《现代汉语句法异化及翻译体问题》《当代教育理论与实践》01期 2010
- 杨昌江《“非儿童本位的”优秀儿童文学》湖北第二师范学院学报06期 2011
- 杨昌江《论“冰心体”语言》湖北第二师范学院学报10期 2018